

## ある閉ざされた雪の山荘で あらすじとネタバレと感想

### ○ストーリー

演出家の東郷陣平が開催するオーディションに集まった劇団「水許」に所属する 7 名の若者俳優たち。

登場人物は主役クラスを演じる本多雄一とリーダー格の雨宮恭介を初め、田所義雄、笠原温子、元村由梨江、中西貴子と本作の主人公で新入りであり探偵役の久我和幸です。

舞台は高原にあるのどかなペンションです。

しかしその「舞台設定」は吹雪舞い散る雪山のペンションで脱出する事は不可能、そしてそこで次々と起こる殺人事件を推理していく物語を 4 日間通して「演じる」というもの。つまりフェイクのクローズドサークルです。

しかし演技と言いつつも実際に一人、また一人と人が消えていきます。

まず 2 日目にピアノ演奏中にピアノとつないでいるヘッドフォンのコードで笠原が絞殺されます。3 日目に花瓶で殴打され元村が撲殺、4 日目に直接手で首を絞められ雨宮が絞殺されます。

これは演技なのか、実際に起こっている殺人事件なのかわかりません。

それこそ金田一少年の事件簿等に登場する絶海の孤島のように物理的に逃げ出せない、電話線は切断されている、携帯の電波は届かないなど逃げる事も助けを呼ぶことも出来ない舞台、つまり本物のクローズドサークルではありません。普通ののどかな高原にあるペンションなので逃げ出そうとすればいつでも逃げ出せますし、警察に通報する事も可能です。

しかし役者たちの考えとして、もし本当に殺人事件が起きているならば複数設置された監視カメラでこの様子を観ている東郷がすでに警察に通報しているはずと思う事、本当の殺人事件かわからない状況下でこのオーディションから逃げ出せば役者人生に大きな影響が出る事などから 2 日目に殺人が起きた後も誰一人逃げ出す事も通報もしません。

しかし本作の主人公であり新入りの久我は徐々にこれは本当の殺人事件ではないかと推理を始めます。

### ○動機（過去の事件）

劇団「水許」では過去に麻倉という実力派の女優がいました。しかしあるオーディションで圧倒的演技を見せ付けるも落選。その理由が同じ女優の笠原、元村が演出家の東郷と「寝た」からというものでした。

この状況に嫌気がさした麻倉は水許を退団。役者を引退します。

しかしそこに呑気に笠原、元村、雨宮が引き留めに伺います。そもそも笠原たちが東郷と「寝た」から自分が落選したと思っている麻倉は怒りを爆発させ笠原と取っ組み合いの喧嘩になります。止めに入った雨宮をも押し返しえた結果、雨宮は机に激突し置いてあったお茶で顔面を火傷します（この件に関しては麻倉がすぐに謝罪）。その後追い返された三人。

帰りの車中、麻倉の言動にどうしても納得の出来なかった笠原が麻倉に電話し「雨宮が事故って中央分離帯に激突した」と嘘の電話を入れます。自分が火傷させた事で事故ったと思ひ動揺した麻倉は本当に事故に巻き込まれ下半身不随の重傷を負います。水許で随一の役者である本多は三人に怒りを爆発させます。

### ○真相

真実を知った麻倉は三人を殺したいという思いにかられます。しかし下半身不随の自分ではどうする事も出来ない。死を意識する麻倉に本多が自分が麻倉の替わりになる事を告げ、三人に復讐する舞台を作ります。それがこのフェイクのオーディションであり、フェイクのクローズドサークルのペンションでした。

ほぼ予定通り計画を実行していった麻倉と本多でしたが、主人公の久我は些細な違和感を見逃しません。

一人目の殺人である笠原殺しの際に凶器に使用されたピアノのヘッドフォンのコードがピアノから抜けていなかった事(絞殺しようとして本気でコードを引っ張れば必ずピアノからコードが抜けるはず)、しかし次に見た時コードが抜けていた事、そして本多しかコードが抜けない状況を知った久我は本多が実行犯である確信を持ちます。本多の殺人を立証するために4日目の夜、久我は田所、中西と一緒に部屋で過ごしその様子を録画。完璧なアリバイを得ます。また動機から黒幕に麻倉がいる事も見抜き、さらに自分と本多が一晩一緒にいた3日目の夜に元村殺しが実行されている事から協力者がいる事を見抜きます。協力者が後に殺される雨宮である事まで見抜いた久我は、この連続殺人が実際に行なわれておらず全て演技である事を看破します。

そして久我は、全員の前で真相を打ち明けます。

殺人がフェイクだった事を知らなかった麻倉は生きていた三人を見て発狂します。しかしこれは仮に殺人を実行しても結局、実行犯の本多も黒幕の麻倉も逮捕され、誰も幸せにはなれない。麻倉には幸せを取り戻し生きてほしいと願った本多が殺され役の3人に「死ぬ気で演技しろ」と一計を案じたのでした。

本当に大変な事をしてしまったと再度わかった三人は、誠心誠意麻倉に謝罪します。そして笠原が「今更言えた義理ではないけど、もう一度一緒に芝居をしよう」と涙ながらに語りかけます。「限られた役しか出来なくなっちゃった」と言いつつ三人の謝罪を受け入れる麻倉。その後、8人は本当の舞台で共演。主演麻倉によるその舞台のタイトルは「ある閉ざされた雪の山荘で」でした。

### ○感想

私は原作小説は読んでいませんが、本文で書いた通り予告編を観て面白そうだったので若い俳優さんが大活躍という触れ込みを聞き観に行ってきました。

本作に限らず小説の映画化では当たり前ですが尺の関係から設定の変更や内容を端折ら

ざるを得ないです。しかし逆に言えば中だるみすることなく一気に物語が進むため飽きる事はありません。本作においても2時間があつという間に過ぎていきました。

本作は所謂素人探偵物です。しかし本作は同じ素人探偵物でも名探偵コナンのようにすでに高校生探偵として名を馳せていたり、金田一少年の事件簿のように有名探偵である金田一耕助の孫だったり明瞭な探偵としての要素がある訳ではありません。巻き込まれていくうちに探偵役になっていくという設定です。

つまりコナンや金田一ではコナンや蘭、一や美雪のように「絶対に犯人ではない」という人物がおり、ある意味コナンや一らが出ているシーンには安心感があります。しかし本作にはそのようなシーンはありません。7人誰もが犯人である可能性があり、探偵役が犯人の可能性、殺され役が狂言で犯人の可能性等、あらゆる可能性を楽しめます。

本作は先述の通り、若者俳優のみで物語が進行します。金田一少年の事件簿などではこのような設定の場合、執事役などで年配の方が登場し、時になだめ役になったり、大人な対応を見せたりしますが、本作ではそのような立場の人はいません。それだけに若者たち同士の葛藤が良く描かれていて好印象でした。

7人は同じ劇団員といってもライバル同士。主人公はその日初めてメンバーと顔を合わせていますし、演出家と「寝て」主役をとっている女優もいるなか、些細な言動でもめ事にも発展します。物語中は全員20代後半という設定(たぶん…)なので、20代までを青春と表現するなら、まさに青春の最終ページの物語とも言えます。

実際に殺人は行われていなかったというラストは一瞬麻倉の事を思うと「何で?」という疑問を持つ事であろうかと思えます。しかし金田一少年の事件簿(ばかり例えに出して申し訳ありませんが…)等でも、殺人を行なった犯人がその後幸せになったというケースはほぼなく、皆不幸になっています。本作に限らずこのような推理ものでは概ね被害者側にも殺されるに相当する理由があり、加害者を一概に憎めない事が多いです。しかしそれだけに加害者側にも本当は幸せに生きてほしいと思ってしまう事もしばしばです。

ですからこのラストは20代の若者たちがそのような不幸にならず、幸せに前向きに生きていく様子が描かれたハッピーエンドと言えるのではないのでしょうか。もちろん下半身不随自体が治った訳ではないので、絵に描いたようなハッピーエンドという事にはならないかもしれません。しかしそれでも前を向いて生きる、仲間との信頼を取り戻すというのは良い結末だったと思います。

最後に舞台が「吹雪の中の山荘」という「設定」のみで実際には穏やかなペンションというフェイクのクローズドサークルという設定も面白かったです。

昨年から妙に邦画に心打たれているなあと思ったりしながら…

最後にいつも言っている事ですが、一回観ただけなので細かい内容には誤りがあると思います。ただし今回は登場人物のみ調べて書きましたのでその間違いはないと思います、たぶん。